室町後期歌書誌

═実隆・基綱・済継・統秋・宗祇・道堅═

伊藤　敬*

序

昭和四十年十月、和歌史研究会の人々によって「私家集伝本書目」一巻が世に送りだされた。その業績の意義の一つに、従来閑却されていた室町後期の歌書の所在を網羅していることがあげられよう。当期の歌人・和歌史の研究を推進するうえで、まず資料の整理ということが心須のことだからである。

私はこの書目に拠って、これまでに三条西実隆・公条・実枝らの歌業を眺めてきた。そのかたわら、実隆と親友のあった人々の歌書をも整理してみた。その第一回目の報告として、標記の六人をここにとりあげることとした。すべて、室町後期を代表する歌人であり、多くの歌書を残している人々である。

他に、皇室系歌人（天皇・伏見宮関係）、歌道家（飛鳥井・上下冷泉関係）、将軍家（義政・義尚）、その他の武士や地下歌人の系列も、その歌書については研究が放置されている。最近に、土田将雄氏の「細川幽斎家集の研究その一・伝本解説」（上智大学国文学論集一）が発表された。まずはこうした基礎的作業が必要なことであろう。

本稿は、歌書誌であって歌書誌考とはなり得なかった。始め各歌人の伝記をも付して当代における和歌や歌書そのものの意義を考察する予定であった。しかし筆を進めるにつれてますます距離を感ずるに至りこれを断念した。このことは今後の課題として自らに賦することとし、今回は、伝本書目や国書総目録を補訂整理することにとどめた。直接的には各歌人の全歌集定本の資として役立てばと願うのみである。

記述はできるだけ具体的にと考えたが、各歌人の伝本の質的差や数により、多くを記すことができず、そして不統一となってしまった。未見のものもある。いつかまた完全な統一のとれたものとしたい。

なお、記述の便宜上、諸本の呼称は書目にその掲載順に付した通し番号（ゴジック）を用いることとした。直接の書名でないために不便なものとなったが、書目や各々の始めにある一覧表によって御利用いただきたい。なお、文庫旧所蔵のものは体裁上文庫名をもって統一した。

この書誌作成のために、書陵部の橋本不美男氏、愛知学芸大の樋口芳麻呂氏、立教大の井上宗雄氏、愛知県立大の島津忠夫氏、彰考館の福田耕二郎氏、京都の田中重太郎氏、その他各図書館文庫の職員の方々から多大の御指導と御援助を得た。ここに厚くお礼申しあげる。

三条西実隆

書目を補訂し、諸本の内容によって整理分類すると次のようになる。

○除くもの

31　雪玉集一　神宮文庫

良経・定家・家隆の三玉集を誤って入れている。

76　聴雪和歌抄一　北岡文庫

公条の着到百首三か度の集である。雪玉集板本巻十六の5・6・7にあたる。

88 実隆公五十首和歌　内閣文庫（賜芦拾葉五）
杉原宗伊の百首を実隆が合点し五十首を抜書したもの。百首は64行類抄紙背にあり、このことが記されている。

○加えるもの（書目の補遺の部の二冊を含める）

101 雪玉集　一　森文庫
102 雪玉集　三　青山文庫
103 今花集　一　北岡文庫
104 百首　雪玉集之外　一　書陵部（再昌草付載）
105 詠百首和歌　一　久保田淳
106 両吟百首和歌　一　松平文庫
111 着到百首　書陵部（先代御便覧第六）
107 五十首已下　雪玉集之外　一　書陵部（再昌草付載）
108 詠三十首　書陵部（先代御便覧第二四）
109 続撰吟集　八　尊経閣・内閣・神宮・伊達文庫
110 類聚和歌　一　書陵部
（注　109・110は、実隆との関係深い私撰集であるため特に加える。）
112 源氏巻名和歌　内閣文庫（賜芦拾葉五）
（注　細川幽斎としているが、本文は雪玉集所収の実隆作と同じもの）

○未見もしくは所在不明のため明らかにしえなかったもの。

32 雪玉集　二　田中
72 逍遙院百首　一　志賀須賀
39 雪玉集下巻抄写　二　弘文荘書目一七
40 前内相府実隆公和歌　一　竹柏園蔵書志
84 逍遙院百首和歌　一　竹柏園蔵書志

A　部類のみの集（狭本系写本）

9 雪玉集　三　写　書陵部（一五四・八七）
10 雪玉集　三　写　書陵部（五〇一・七〇一）
22 逍遙院集　一　写　高松宮（ほ・一〇九）
23 逍遙院集　三　写　高松宮（る・二五八）
30 雪玉集　一　写　蓬左文庫（一〇六・四六）
11 雪玉集異本　二　写　書陵部（二六六・七三六）
27 雪玉集異本　一　写　内閣文庫（二〇一・五〇四）
33 雪玉集春夏のみ　一　写　金刀比羅宮（一二二〇）

B　部類と雑々の集（中本系写本）

7 雪玉集　四　写　書陵部（五一一・一四）
28 雪玉集　四　写　内閣文庫（特・二七・一七）
2 雪玉集春夏、秋冬のみ　二　写　彰考館（巳・五）
37 実隆公詠草春夏、雑々のみ　二　写　伊藤敬
8 雪玉集恋雑のみ　一　写　書陵部（伏・一八一）
24 逍遙院集雑々のみ　一　写　高松閣（歌一・一七一）

C　部類と雑々と定数歌の集（広本系写本・刊本）

3 雪玉集異本　六　写　国会（八三〇・一七三）
26 雪玉集異本　七　写　森文庫（九一一・森・SAN）
34 雪玉集異本　三　写　松平文庫（一三七・二〇）
102 雪玉集異本　三　写　青山文庫
21 雪玉集　二　写　高松宮（る・二六一）
41～45 雪玉集　寛文十年刊　一八　刊　京大その他

D　定数歌と御会歌（一人三臣和歌抜書）の集

20 逍遙院詠草　百首二三か度　五　写　尊経閣（一三・一六・大）
その他御会歌

E 定数歌の集

一、百首詠を主とする集

36 瑤雪集 二三か度 二 写 北岡文庫（午・三六・六印）
67 聴雪集 二三か度 二 写 尊経閣（九四・古）
29 聴雪集 一一か度 一 写 内閣文庫（二〇一・四九二）
54 聴雪集百首 一一か度 一 写 書陵部（五〇一・七四〇）
38 雪玉集 一一か度 二 写 田中重太郎（二冊目は五十首、以下、後出）
56 遊遙院内府百首 一一か度と三十首 一 写 書陵部（五〇一・七三八）
63 詠百首和歌 一一か度と三十首 一 写 書陵部（五〇・一・八二四）
35 遊遙院殿御詠草 一一か度と三十、十二首 一 写 北岡文庫（午・三六・二印）
60 遊遙院百首 九か度 一 写 書陵部（五〇一・八五七）
1 遊遙院瑤樹抄 八か度 一 写 彰考館（巳・六）高台院和歌集と合綴
104 百首 雪玉集之外 六か度 一 写 書陵部（特・一）再昌草付載
58 遊遙院内大臣百首 四か度 一 写 書陵部（五〇一・七五三）
59 遊遙院百首 四か度 一 写 書陵部（特・五四）
103 今花集 四か度 一 写 北岡文庫（午・三六・六印）
62 春日社奉納百首等 三か度 一 写 書陵部（二六六・四六〇）

二、単一の百首詠

53 庚申一夜一首 付七絶五首 一 写 国会（二四五・一二六）
55 遊遙院入道内府百首 付三十首 一 写 書陵部（特・五三）
57 遊遙院内大臣百首 一 写 書陵部（五〇三・六五）
64 詠百首和歌（行類抄紙背） 一 軸 書陵部（四一五・二八四）
68 住吉社法楽百首 一 軸 高松宮（ろ・貫・四五）
69 遊遙院百首 一 写 高松宮（へ・七七）
70 遊遙院百首 一 写 高松宮（歌二・一八三）
71 遊遙院百首 一 写 高松宮（ふ・一三八）
75 遊遙院百首 一 写 京大（中院・Ⅵ・九八）
105 詠百首和歌 一 写 久保田淳
52 三吟百首和歌 一 写 狩野文庫（一〇八五四）
74 着到百首和歌 両吟 一 写 神宮文庫（第六門・一三一三）
106 両吟百首和歌 一 写 松平文庫（一四〇・三六）

三、撰集・類集所収の百首詠

61 遊遙院百首 二か度 写 書陵部（二六五・一一〇五）百首和歌集成
65 句題百首 写 書陵部（二六六・四）待需抄一六
66 遊遙院内府百首 写 書陵部（四五八・一）片玉集前集二六
73 堯空百首 写 刈谷市立（三・甲・六二〇三）蓬芦雑鈔四
77 百首和歌 写 樋口芳麻呂 点取類聚八
78 夏日詠百首和歌 写 樋口芳麻呂 点取類聚八
79 独吟百首 写 樋口芳麻呂 点取類聚八
80 百首和歌 写 樋口芳麻呂 点取類聚八
81 百首和歌 写 樋口芳麻呂 点取類聚八
82 百首和歌 写 樋口芳麻呂 点取類聚八
83 百首和歌 写 樋口芳麻呂 点取類聚八
111 着到百首両吟 写 書陵部（二六五・一一一三）先代御便覧第六

四、五十首以下の定数歌集

38 雪玉集 二冊目のみ 五二か度 二 写 田中重太郎
85 遊遙院五十首部類 五九か度 一 写 書陵部（五〇一・七五四）
107 五十首已下雪玉集之外 一一か度 一 写 書陵部（特・一）再昌草付載
91 詠三十首和歌 二か度 一 写 書陵部（四五七・一六九）

五、単一の五十首以下の詠

86 結題五十首 一 写 書陵部（五〇一・七五四）
87 堯空五十首 一 写 書陵部（五一一・二七）
16 遊遙院大臣和歌 付和韻詩 一 写 書陵部（五〇一・三五三）
19 花月和歌 一 写 書陵部（F四・一一八）
96 住吉十首 一 写 書陵部（F四・一二一）
97 菊十首和歌 一 写 書陵部（F四・一二二）

（注 90詠三十首和歌は、63詠百首和歌に所収のものであるので、目録からは除く。）

六、撰集類聚所収の五十首以下の詠

88 源氏巻名和歌　写　内閣文庫（二一七・一一）賜芦拾葉五
89 法文五十首　写　神宮文庫（第六門・一一四三）後鳥羽院御百首と合綴
92 詠三十首　写　井上宗雄　詠三十首
92 法楽三十首（北野法楽）写　書陵部（二一一一三・二六五）先代御便覧第五
93 同和三十首　写　書陵部（二一一一三・二六五）先代御便覧第二八
108 詠三十首　写　書陵部（二一一一三・二六五）先代御便覧第二四
98 詠十首和歌　写　書陵部（二一一一三・二六五）先代御便覧第六
99 春日社詠十首　写　書陵部（二一一一三・二六五）先代御便覧第二四
100 石山寺十首和歌　写　松平文庫（一一九・七）歌書続集

F　その他

一、雑纂の集

13 逍遙院内府詠　三　写　書陵部（一五四・五三六）
17 逍遙院入道内府詠　一　写　書陵部（五〇一・七五二）
25 逍遙院詠　一　写　高松宮（歌一・一七四）
12 雪玉集追加　一　写　書陵部（伏・一八六）

二、再昌草

4 再昌草　三五　写　書陵部（特・一）
6 再昌草　一九　写　書陵部（鷹・三八六）
46 再昌草　三　刊　養徳社刊　桂宮本叢書

三、類題集

4 聴雪和歌集　二　写　国会（一二〇・七八）
101 雪玉集　一　写　森文庫（九一一・一四八・二五・森・SAN）
48 雪玉集類題　三　写　書陵部（鷹・三一七）
48 雪玉集類題　一四　写　竜門文庫（七七三）
18 逍遙院名所和歌類聚　一　写　書陵部（五〇二・七五）

四、類句集

49 雪玉類句　下句、伊—奈部　一　写　書陵部（五〇一・二二五）
50 雪玉類礎　第五句　一　写　書陵部（五〇一・八三）
51 雪玉集　五句別類句　写　書陵部（五一五・六一）造玉類礎
付1 三玉類句　下句別類句　二　刊　享保七年刊　柏玉・碧玉・雪玉集
2 三玉和歌集類題　七　写　書陵部（二一三・三三）柏玉・碧玉・雪玉集
3 雪中庵集　四　写　書陵部（三四・六三）為家・頓阿・実隆

五、私撰集・類集に混入の詠

1 道堅家集　十か度　一　写　彰考館（巳・一〇）
20 道堅百首　十か度　一　写　松平文庫（一四〇・三二）
14 道堅法師集　七か度　一　写　書陵部（五〇一・七〇九）
15 道堅法師詠　四か度　一　写　書陵部（五〇一・八三九）
109 続撰吟集　八　写　尊経陵・内閣・神宮・伊達文庫
110 類聚和歌　一　写　書陵部
付 君臣和歌　一　写　書陵部（五〇一・七八一）後土御門ら八人の集
三玉和歌集抜書　一　写　鶴舞（河・サ・五二）

付　雪玉集（板本）未収歌（定数歌のみ巻頭歌を掲げる）

一、104 百首雪玉集之外　百首六か度（書陵部）

1 立春　色も香もはやうち出よ花鳥のをのか時なる春はきにけり
2 立春　けさ氷ひまみえそめて吹かせや春くる道のしるへしつらん
3 立春　芳野河いはなみはやく年越て水の心も春やしるらむ
4 年内立春　ちる花のふる郷なりしふる年をいかに尋て春はきぬらん
5 春従東来（二首目（巻頭欠））　けふしはや春の光にあふみのや山は鏡のそらにむかへて
6 若菜　おなし野のわかなもはやくもえぬへし先こそ分め荻のやけはら

二、3 雪玉集異本（国会）詠百首和歌（部類の春に十七首でている）

立春　野も山もけふあら玉の年のはにめくむ草木の春はきにけり

三、55・56・57・63（書陵部）の諸本に、104の2「立春　けさ氷」が収められている。

四、71逍遙院百首（高松宮）は、104の1「立春　色も香も（高ね）」と同じである。

五、106両吟百首和歌（松平文庫）（三三玉類句には収められてある。未詳）

歳暮立春　春霞たてるや同じ年の緒をこなたかなたにかけてみすらん

六、107五十首巳下　雪玉集之外（書陵部）

1早（五十首）春　春風はところわかてや芦根はふうきも氷のとけ渡るらむ

2年内立春（三十首）春といへとまたふる年の嶺の雪をいかに霞のたたむとすらん

3立春（十五首）ふる年は昨日の夢の跡もなくあしたの雲に春や立らむ

4（十三首）今夜こそおもふことなき月ならめ日比の雨をおくりつくして

5　高野山参詣記　漢文　太永四年四月十九日甲寅晴早朝……

七、16逍遙院入道内府歌（書陵部）（七絶一首、序、二九首、七絶一首）（二九首）

我なからかすまへしらぬ老かせにあはれをかけてとふやたれなる

八、55・56・63の百首詠集に付載の三十首、書目で90としているもの。

春　わたの原沖つしほあひも朝かすみのとかに成て春や立らん

九、98詠十首和歌（書陵部、先代御便覧第六）

雪中鶯　鶯の声のうちなる谷風に消あへぬ雪も春やしるらむ

十、100石山寺十首和歌（松平文庫、歌書続集）（種々の歌体の歌十首）

長歌　露時雨ふりにしならのはるかにも名におふ宮の……

A・B・Cの雪玉集について

広本雪玉集については以前に考察したものがあるのでそれを参照ねがうこととして、ここでは、異本と称されるものについて触れておく。異本の内容には二種あって、一つは広本巻十六、十七に収められる定数歌の異本と、一つは巻十八に部類された御本ノ外と呼ばれる散在歌の収集とである。前者を狭義の異本後者を御本ノ外とする。（注十）

Aの11・27の写本は、御本ノ外を含むことにおいて狭本系に対する異本となる。ただし11はそれを巻末に収めるのに対して、27は各部立の巻末に配置し、しかも春と夏の部をもたないという相違がある。次に述べるCの異本四種もまたこの御本ノ外を持つものであるが、歌数は（諸本により多少出入がある）春約八〇、夏約七〇、秋約一九〇、冬約八〇、恋約一一〇、雑約一五〇、計七八〇首前後である。広本巻十八所収歌は実隆の詠のみで四八四首、その差の約二〇〇首は重出歌や定数歌があることから生まれている。

Cの3と26は34と102あるいは広本とその組成を異にする。（ただし、26はその巻五・六が3の巻五、巻七は3の巻六の前半までである。即ち3の五十首以下の定数歌、御本ノ外を欠く。26が3の祖型か省略かは未詳。）

3は始めに百首集を置き（第一、第二）、次に部類（第三、第四、第五）を収め、第五冊の残りに中本系の雑々の部、第六冊を異本の定数歌集と御本ノ外とにあてているものである。この定数歌の部が中本の雑々に加えられ整理された形が広本の巻十三、十四、十五となり、残りの百首詠その他が巻十六、十七の「従是已下異本」の二巻となった。ただし、その改編に3の写本が直接関与したとはみられない。それは、3にありながら広本には収められない定数歌がみられるからである（例えば、3の巻一の終りの詠百首は文明十七年九月九日の着到和歌で、内閣文庫三〇一・三元の中の実隆の詠である）。それにしても、智仁親王や後水尾院のころにできていた中本系写本に対して3ような異本があり、後述する38・85のような五十首以下の定数歌集が集大成されて広本に組みこまれることになったと考えられる。今は、この写本からこの写本へと特定のものをあげることはむずかしい。大体の道すじは右のごとくであったろう。

3と26に対し、34と102はまた構成を異にする。この両者は同型の写本である。上巻は春夏秋冬の部立、下巻が恋雑の部立となり、御本ノ外が各部立の終りに加えられている。そして下巻の後半が、詠源氏物語巻々和歌以下の定数歌集（主として五十首以下）となっている。その上下巻の間に百首集の中巻が置かれている。上下の続きがここで中断されることになった。どうしていつこうした配列になったかは不明である。その結果として、下巻の最後の「詠法文五十首和歌」の奥書にある「天文初元九月尽日、楽門堯空書」の語がこの写本成立を示すかのごとくに、書目や松平文庫目録で誤られることにもなった。松平文庫の34の場合、上巻と下巻は同筆蹟で中巻は別筆である。中巻に次の奥書のあることを付記しておく。

石此写本者元和六年卯月廿一日阿野実顕卿以官本書写之由有奥書前二帖者以他本写之畢

21の二冊本は、部類の集と百首集からなる。百首集は、広本巻十六の2に始ま

り巻十七の4で終り、部類は広本巻十八所収歌で終っている。これも異本と思われるが、巻の始め終りを写真にてみての範囲であり、子細は未見であるので後日を期することとする。

D・Eの定数歌の集について

始めに百首集について。広本の配列順と同じものは、20・67・45・29・38の写本である。巻七から巻十二にあたるが、20と67は六巻分全部、54と29は前半、38は後半に該当する。20の二冊目の奥によれば、慈運（曼殊院）が大永三年四月に書写したという。つまり、広本巻七、八、九を構成する百首十一か度は、実隆の六九歳の時には出来していたのである。所収歌が年代順になっていることからみてもこの第一次ともいえる百首集は一応の整理を経たものと言える。後半の百首十一か度は、年代の点でも内容の点でも秩序だってはいない。どのようにして後半が固定したか不明であるが、27の奥によれば、万里小路輔房（一五四二—一五七三）の筆による写本があったということであるので、実隆の死後三十五年までには、百首詠二二か度＝広本巻七—十二までは完成していたとみられる。

38は後半の百首詠十一か度をその上巻に収めている。その前半がもとあったものか、後半のみ独立してあったものの写本かは未詳である。

なお、20の巻五は御着到歌を六か度収めているが多くは残欠である。しかし終りに文亀永正の一人三臣和歌中の実隆の歌（御会歌）をも付している。百首の定数歌集から成長したものとみることができる。

以上の広本系写本に対するのが、36・56・63・35・60・1などの写本である。36（北岡文庫）の奥書は次のように書かれている。

此両冊　逍遙院殿御詠歌也連々所望之処借得之号瑤雪集云々雖不知誰人之所作執心之間加書写了猶随求得可令類聚耳

文禄五年三月十八日　　玄　旨（花押）

ここに所収の二三か度の百首（一か度は題のみにて本文欠）は、その順において広本とは全く異なる。20・67とも異なる。ところがその順は、無題・独吟・夢想・春日社法楽・着到となり、以下年代順の詠となって、終りにまた独吟百首となっている。広本よりも整然としている。

35は定数歌十二か度を擁するが、大半が永正十年以前のもので（他は文亀明応のもの）、年月順になっていることからみて、これも実隆生存中のものと思われる。しかし一番目の百首が巻十六（異本の部）に収められていることからみて、広本からみれば異本となるようである。

56は63と同内容の伝本である。百首詠四か度以外は、六か度が巻十六と十七所収であり、最後の百首と三十首が広本未収であることからみて、やはり御本に対する異本ということになる。

60は始めの「年月可尋之」の二か度の後に、文明から永正に至る七か度の百首を収めるものである。奥書によれば中院通村が官本を借りて書写したもので、それを通村の弟親顕、さらに元和五年には別人が書写したものとなっている。年月順になっている。これも広本とは別系である。もしも広本の材料となっていれば、広本が年代順に整理されているはずだからである。

1は百首八か度を収む。最後の百首が巻頭にくれば、永正三年三月から同十年十二月に至る年月順となる。このずれの由来は不明であるが、実隆が最も活躍した後柏原院を中軸とする永正期歌界の作のみを集めている点で特色がある。

同じことが59の写本についても言える。永正六年九月から同十年正月までの四か度を収めるものである。（他に一か度永正八年三月三日以来の着到を省略している。）これらは実隆の生前にまとめられていたものと考えられる。

103今花集は、文亀三年三月から永正八年三月の着到歌四か度を収め、幽斎の書写という。これは書陵部（特・四五）の金花集（文亀三—永正八、御着到百首）から実隆の詠を抜書したもので、名称を金から今と替えたものと思われる。

以上定数歌の百首詠の集について注目される点のみ摘記した。単一及び撰集類聚の百首の所収関係は別表によることとし、次に五十首已下の集について同じ要領で触れておこう。

38の下巻は、広本の巻十三、十四、十五にあたるものである。広本以前のものと思われる。今のところこの形の写本を他にみない。上巻が巻十、十一、十二と同じであるので、あるいはその前にも巻七、八、九に該当する一巻があって、定数歌全集（御本）の体をなしていたとも考えられる。

85は、私の数え方では五九か度となる。広本の巻十三から巻十五に及ぶが、38とは違って百首詠二か度・三十首一か度・他人の詠一か度・重出一か度を有している。板本に未収のものはない。百首と三十首は他の巻と重複するものであるの

で、それらが整理されて広本になったと言える体裁のものである。

107は、百首集の104とともに再昌草に付載されているものであり、ともに広本に未収のものである。特に大永四年四月の高野山参詣記は漢文の日記であって、公記にいう「自今日事在別記、詣住吉・天王寺・高野等」（大永四・五・一九の条）の別記にあたるものであろう。（再昌草刊本解題参照）またそのあとの和歌や基綱との消息は64改元行類抄紙背に記されているものと同じである。実隆の手控えようのものと思われる。

単一の定数歌については次の二つをとりあげておく。

16は広本未収のものである。ある僧（未詳）からの七絶に対し、序と二九首と七絶とをもって答えた消息の体のものである。その序に「予江東の乱を避て栗里に帰ることすでに五秋螢を拾ふといへとも……」とあり、二首目に

諸ともに馴しあつまをわかれきて
かゝらむ物と身を料りきや

とある。江湖散人実隆卿也の署と合わせてみると、江東遊士と号して駿河に下っていた実澄のことが思い浮かぶ。あるいは実澄の作かと疑問を提出しておく。

100は「冬日於石山寺詠十首、和歌」と題するもので、長歌、反歌、旋頭歌、混本歌、物名歌、折句歌、折句沓冠、廻文歌、無同文字歌、誹諧歌の各一首からなるものである。

F　その他について

13・17・25は同系の写本である。大永八年（享禄元年）正月から天文元年十一月までの月次御会歌を収集したもの、即ち、享禄年間の御会歌集である。一人三臣和歌から実隆の詠を抜いたもの（文亀三年—永正十三年）が20に付載されているが、これと同じように、歌会詠から実隆の歌を抜いて作られたものであろう。巻末には詠法文和歌五十首（広本巻十四の三）と頓孝朝臣への返事（再昌草七八ページ）が付されている。

13は三冊となっているが、二冊目と三冊目は同じものである。17はその上冊にあたり、ともに雪玉集四季部之外として十四首添えられ、25は13のほぼ後半にあたるものである。

12は虫損甚しく判読しかねたため、詳しくは調査していない。

4・101・47は広本雪玉集所収歌をすべて類題としたものである。101の奥によれば、春一三五六、夏六八七、秋一三八六、冬八〇二、恋一〇八〇、雑一九二五、計七三三六首と記されている。101が追加の記載を多くしているのが注意されるが、三者の比較は今後の問題とする。なお、48竜門文庫本は未見である。

18は実隆の詠歌中名所の地名のよみこまれているのを集めて、いろは順の地名にすべて類別したものである。地名三五〇か所、一一八七首を収める。奥書などはなく成立に関しては未詳。

道堅の名を冠する歌書の中に、実隆の詠が多く含まれている。ほとんどは十ないし三十首詠で、公条・資直・政為らと和したものである。（道堅の項参照）主として永正十年前後のものである。

109は徳大寺家にて類聚されたと思われる私撰集で天文十年（一五四一）には全八冊が完成している。実隆の死後四年目のことである。中に実隆の詠が多くあり、それらはすべて雪玉集に拾われている。御会、歌会、贈答など多面に及ぶものである。総数三四二八首のうち実隆の歌は四七〇余首に及ぶ。（拙稿、三条西実隆と和歌その二参照）各写本巻序を異にするが、内容と奥の年次からみて尊経閣本が原型と思われる。

110は道堅の歌集や雪玉集と関係深い撰集である。永正十年前後の、実隆・公条・道堅・資直・政為・肖柏・尊海らの詠が収められている。殊に道堅の詠が多い。実隆の歌も約三五〇首ある。住吉社法楽や文明比常徳院御会歌など、御本ノ外の材料となったとみられる歌を含む。なお、八か所に「愚歌除之」という註記がある。この愚なる人物は誰であるか、前記以外の人とすれば豊原統秋の名が浮かぶがまだ確証はない。また、それぞれの和答において書写の際に自分の歌を省く習いがあるとすれば、この類聚の編者と愚とは関係がないことになる。今後の課題としたい。

君臣和歌一巻は、後土御門一一首、後柏原五一首、後奈良一二首、邦高一五首、貞敦二六首、実隆六四首、公条二〇首、実枝二〇首、計二一九首である。約1/3が実隆の詠である。その編の時期や意図は不明であるが、三条西の存在の大きさを語る写本である。

以上特に記すべきこと、知り得たことを列記してみた。実隆に関する歌書は数多くあり、量も膨大である。そのため不統一見落し見誤りが多くあることをおそ

れる。他にもまだ実隆の詠を含む歌書の数は多く、今までにあげたのみでは当然不備のそしりは免れえない。しかし、まず一つの枠組を作った上で、それを足場としていくことで完成に近づくものであると思い、あえて脆弱とは知りつつもここに提示したものである。他山の石となれば幸いである。

終りに、定数歌所関係の表を付しておく。

定数歌所関係の表（数字は所収関係の表を付しておく。）

一、百首

順	巻頭歌題と初句	（書名）	その他
巻七 1	立春 暁 おき出て	1 1 20・67 54・29 38 3・101 34・102 36 56・63 35 60 1 58 59 103 62	
2	都立春 野辺ははや	2 2	
3	立春 君か代を	3 3	
4	都鄙立春 鳥かなく	4 4	
巻八 1	春風来海上 明わたる	5 5	75・61
2	年内立春 はるやこし	6 6	108・65
3	歳中立春 春かすみ	7 7	
4	年内立春 磯の神	8 8	
巻九 1	山早春 霜こほり	9 9	
2	正朔子日 万代を	10 10	
3	立春 もろこしも	11 11	
巻十 1	（春） 打なひき	12	
2	関路早春 関の戸の	13	
3	早春 木のめにも	14	
4	立春 水上も	15	
5	（春）神祇 春日野や	16	
巻十一 1	元日 立かはる	17	
2	（春） 天のした	18	
3	立春 立かへり	19	
巻十三 1	歳暮立春 いかにおしみ	20	
2	立春 ふる郷と	21	
3	音羽河 きけはけさ	22	
巻十六 1	立春 ふる雪の	5	
2	立春 あまつ空	3 4	64 82
3	（春） けふしはや	12 6	
4	早春湖 ささなみや	2 14 5 1	70 61
(5)	都立春 たちそむる	13	(76)
(6)	歳暮立春 あまつ空	14	(76)
(7)	立春 雪のうへも	15	
巻十七 1	（春） 春のくる	17 7	68
2	暁立春 このねむる	1 13 8	73 75 83
3	初春 石上	16 16	52
4	元日宴（歌欠）	18 4	
5	初冬時雨 見し秋に	20	85

二、五十首以下

順	歌数	巻頭歌題と初句	（書名）	その他
巻十三 1	五十首	山早春 山にまた	中本 38 85 3・巻5 3・巻6 34・102 御本ノ外	87
2	五十首	立春 ふる雪の	1 1 2 2 19 4	
3	五十首	立春子日 小松原	1 3 3 1	86
4	五十首	無三悪趣 かしこしな	4 4	89
5	五十首	初春 みかさ山	5 6 4 3 11 17	
6	五十五首	桐壺 なかからぬ	2 6 7 2 1	88
7	三十一首	（わ） わりなしや	3 7 8 3	
8	三十一首	（お） おきふしも	8 9 21	
9	三十首	滝霞 なかれては	9 11 22	91
10	三十首	早春霞 今朝かすみ	10 12 9 13	91 95
11	三十首	立春霜氷	11 13 23	
12	三十首	翫花 花や知る	4 12 14 4	
13	三十首	早春鶯 又さえむ	13 15 6 10	92 108

巻十四

1 三十首 早春水 年波や 5 14 17 5 2 93
2 二十首 春暁月 槇の戸は 6 15 18 7
3 二十首 （春） 世中の 7 16 19 8
4 三十七首 早春浦 浦風に 8 17 20 9
5 二十首 江上霞 夕つく日 18 21 6 5
6 十首 竹裏鶯 色かえぬ 9 19 22 10 31 37
7 十五首 春日 雨により 20 23 26
8 十五首 秋風 民の草 21 24 27
9 十五首 盛花 山はけさ 22 25 28 19
10 十三首 なかめをきて 10 23 26 11 7
11 十三首 （な） なか空に 11 24 27 17
12 十二首 霞 行末も 12 25 28 13 26
13 十首 君みすや 26 29 10
14 十五首 露とともに 13 27 30 14 5
15 十首 若草 春日野に 28 31 29
16 十首 如是相 あふくそよ 29 32 30
17 十首 雲外郭公 待人の 30 33 25
18 十首 竹裏鶯 色かえぬ 31 34 31

巻十五

1 十首 （春） しら雲の 32 35 1 15 99
2 十首 花はけに 33 36 32 2 21
3 十首 夕菊 秋のきく 34 37 33 97
4 十首 早春霞 今朝かすみ 35 38 7 6 7
5 十首 嶺上霞 ふると見し 14 36 39 15
6 十首 処々立春 たか里も 15 37 40 16 8 7
7 十首 海辺霞 かすみきや 16 38 41 17 9
8 十首 （返し） 花はけに 17 39 42 18 32 2
9 十首 海上霞 霞をや 18 40 43 19 15
10 八首 山市晴嵐 山風の 41 44 9 17
11 八首 山市晴嵐 真柴とり 19 42 45 20
12 七首 （七夕言志） おりしもあれ 43 46 4 18
13 七首 七夕月 この夕 44 47 21
14 七首 七夕迎夜 定めをく 20 45 48 27
15 七首 なかめひ 21 46 49 23 8
16 七首 なかしとも 47 51 13
（17）七首 君とみし 48 52 34
18 六首 なかむれは 22 49 53 24 11
19 長歌二、七首 ならへて 23 50 54 25 12 20 13
20 六首 夢 しらすその 24 51 55 26
21 五首 もらすなよ 25 52 56 27
22 五首 春夜 我のみの 26 53 57 28
23 高野参詣記 四月の此 27 54 58 29

巻十七

6 三十首 山霞 春たしは 8 12
7 三十首 連峯霞 あくる夜の 16 24
8 三十首 （春） なかめやる 10 14
5 （五十首） 初冬時雨 見し秋に 5 20

註 三条西実隆と和歌その二、雪玉集のこと、国語国文研究三〇号。
「雪玉集」定数歌考、苫小牧高専紀要創刊号。

姉小路基綱

始めに伝本書目を補訂する。

一、1卑懐集（伊達文庫）には、定数歌集である「姉小路基綱卿詠歌集」一冊が付されて二冊本となっている。仮に34とする。

二、書目の「飛鳥井雅康」の項にカード整理上の誤りと思われる「飛州黄門百首集」（松平文庫）が混入している。これは基綱の定数歌集である。35とする。

三、26文明百首と同じ内容の写本として、「文明度々百首」（伊達文庫）、「文明明応百首」（内閣文庫）の二種がある。36・37とする。

四、書目には、先代御便覧（書陵部）所収のものも掲出されているが、第二四冊には五十首二か度31の他に三十首一種がある。これは第二八冊の33と同じものである。38とする。なお、同二四冊に、後柏原・為広・基綱の続三十首（各十

首、実隆点）があるが、奥に「永正九四月日」とあるのは、基綱の没年（永正元年）からみて誤りであろう。

五、百首部類第三（彰考館巳十四）に、春日若宮の両卿百首がある。39とする。

六、付として。

雪玉集広本には、実隆との両吟・贈答の定数歌、五十首・三十首・十五首・十首が各一種収められている。

文化十一年（一八一四）に、基綱・済継父子と中院通勝の和歌を類題した「続三玉和歌集類題」（三冊）が刊行されている。そこには基綱の詠が約七八〇首収められている。

以上の補訂を加えた上で、その内容に従って分類すると、次の三つの型に整理することができる。

A 部類の集

一、卑懐集

1 卑懐集　一写　伊達文庫（九一一・二五）
2 姉小路基綱卿集　一写　彰考館（巳・六）
3 卑懐集　一写　書陵部（五〇一・七一五）
6 基綱卿詠　一写　高松宮（歌る・一八〇）
10 卑懐集　一写　田中
12 卑懐集　一写　松平文庫（一三六・一六）
13 卑懐　一写　樋口芳麻呂

歳内立春　くはれる月日のかすの積りきてけふるとしに春やたつらん

二、卑懐集員外歌

4 基綱卿詠　卑懐集之外　一写　書陵部（五〇一・七九四）
5 卑懐集員外歌　写　書陵部（一一一三）二六五　先代御便覧第二三

立　春　万代の春たつけふのわか水にむかふみかけもけにそ老せぬ

B 定数歌の集

一、菅原（東坊城）和長編の集

15 基綱卿百首集　一写　彰考館（巳・一四）
28 飛州黄門百首集　一写　大阪府立（甲・和・六〇）
35 飛州黄門百首集　一写　松平文庫（一四〇・二九）

立　春　のとかなる日のもとよりやをのつからけふくる春も光添らむ

二、和長編を整理した形の集

7 基綱卿詠草　一写　内閣文庫（二〇一・五五三）
9 基綱集　一写　神宮文庫（第六門・一四三〇）
16 百首和歌集　一写　彰考館（巳・一五）
17 基綱卿百首和歌　一写　書陵部（伏・一六三）
34 姉小路基綱卿詠歌集　一写　伊達文庫（九一一・二五）

立　春　のとかなる日のもとよりやをのつからけふくる春も光添らむ

三、百首詠七か度の集

26 文明百首　一写　神宮文庫（第六門・八四七）
36 文明度々百首　二写　伊達文庫（九一一・二五）
37 文明明応百首　一写　内閣文庫（二〇一・三二八）

（春）　千早振神代かはらす立春の雲井のとけき朝日かけかな

四、五十首以下の集

8 飛弾国司姉小路殿御歌集　一写　高山郷土館（香木園文庫和歌・四三）

暁初雁（五十首）　此ころのねさめはなれし枕にもなみたやさらに初かりの声（済継詠）

初春　ときは春色はみとりをはしめとや雪まの山の今朝かすむらん

C 単一の定数歌

一、単独に存在するもの

14 基綱百首和歌　一写　彰考館（巳・一四）
25 基綱卿百首　一写　高松宮（歌一・一四〇）
27 詠百首和歌　一写　天理図書館（九一一・二五・イ三三）

二、類集・撰集に入るもの

18 詠百首　写　書陵部　先代御便覧（一一一三〇）二六五第二八
19 賦四序艶詞詠百首　写　書陵部　〃　〃
20 百首　写　書陵部　〃　〃
20 百首　写　書陵部　〃　〃

21 大樹着到和歌　写　書陵部　先代御便覧（一二六五）第二八
22 冬日同詠百首和歌　写　書陵部　〃　〃
23 百首　写　書陵部　〃　〃
29 百首和歌　写　樋口芳麻呂　点取和歌類聚　第七
30 百首和歌　写　樋口芳麻呂　〃　〃
39 春日若宮（両吟）　写　彰考館　百首部類（已一四）　第三
24 両卿百首　写　書陵部　先代御便覧（一二六五）第二八
24 百首（両吟）　写　書陵部　〃　〃
31 五首十　写　書陵部　〃　第二四
31 五十首　写　書陵部　〃　〃
32 五十首　写　書陵部　〃　第二八
33 三十首　写　書陵部　〃　第二八
38 三十首　写　書陵部　〃　第二四

定数歌の表（Bの一の収載順による）

1	立春（百首）	文明二年二月のとかなる日のもとよりやをのつからけふくる春も光添らむ（文明十二年月日）	14	29
2	（春）	千早振神代かはらす立春の雲井のとけき朝日かけかな	三	23
3	年内立春	文明十二年くはははれる月日の数のつもりきてけふふるとしに春や立らん	三	22
4	都初春	文明十五年九重の都の山の朝霞千代のはしめの春そこもれる	三	21
5	立春	明応二年春のくるそなたを道とゆく水もこほりの関は今朝や出らん（明応三年九月九日着到）	三	27
6	立春暁	いとはやも春こえくらし山かつら霞にかかる色そよふかき（明応五年冬）	三	20
7	早春	荒玉の年なみこゆる松山におなし緑の春の一しほ（文亀元年）	三	20
8	初春（両卿百首）（実隆・基綱）	君か代はことしはしめとくる春もふるき道ある時や知らん（明応七年春）	三	18
9	初春（両卿百首）（実隆・基綱）	三笠山空ものとけし万代のこゑのうちなる春の初かせ（同年冬十二月五日）	24	
10	立春（五十首）	ふる雪の光なからにあら玉のとしゆたかなる春や立らん（実）（文明十七年秋日）	39	24
11	初春	時は春色は緑をはしめとや雪まのやまの今朝かすむらん（文明十三年十二月廿日）	8	1 31 32
12	杜霞（三十首）	みし秋のいなはの雪の面影も田中の森にたつ霞哉	8	31
13	早春水	氷にもよとむせなしと行年の跡にかすめる水ののとけさ	8	33 38
14	（各十首）	君みすや木すら貝すら鳥すらもいもせに物のふかき情を（長享三年七月（室家逝去の折りの実隆との贈答））		
15	（各十五首）	露とともにおきゐてみすはま萩原月もやよるの錦ならまし（文明十八年八月十四夜（明月論の贈答））		
16	帰雁（聴書五首）	葛の葉のわかれにあらぬ春のかりも秋風ふかはかへりこむとや		

A部類の集について

卑懐集はいずれの写本も次の奥書を有する。

右一冊外題卑懐申請徳大寺御本令書写者也
永正十四年十一月廿七日　　伊賀守平朝臣在判

基綱の薨は永正元年（一五〇四）であるので、死後十四年後の書写である。時に徳大寺実淳は七三歳、公胤は三一歳である。徳大寺所持の原本の存在は不明であるが、卑懐集の成立は永正期を下ることのないことが右の奥書により確かである。ところで、それは生前の編か死後の編か、また自撰か他撰かそのいずれであろうか。

結論を先にするならば、私は、生前の自撰であると考える。理由の一つは、「卑懐」という謙辞による命名であり、一つは、巻末の「諫議大夫藤基綱」なる識語である。病悩により死没するその前月（閏三月）に、家としては十一代中絶していた権中納言に昇任するが、もし死後であれば、諫議大夫（参議）の語はここに出てこないはずである。恐らく飛弾に隠栖中に自らの手で編次したものと思われる。

収載歌数は、春一〇五・夏九五・秋一六九・冬九三・恋一三五・雑一三六、計七三三首である。（春に1雑に5首贈答の返しがあり、基綱詠は七二七首となる。なお、2が三首、12が二五首不足であるが、これは写し落しと思われる。）さらに奥書のあとに、後人の加筆と思われる歌が三首付載されている。

卑懐集員外歌には、春三五・雑二三・秋六〇・冬二八・恋二六・雑五四、計二二六首が収められている。文明から明応に至る御会や歌会の詠が主なものである。恐らく宮廷を中心として、歌書に散在するものから収集されたものであろう。編者未詳。

B定数歌の集について

一の和長編の歌書には始めに目録があってそのあとに次の識語がある。

巳上永正九年秋七月日任詠草感得編緝之同志之人追加之日莫相爽乎待可清書者也

大蔵卿和長

即ち、死後八年目の秋に、和長（東坊威）によって編次されたものである。現在伝わっているのは、この編のあとに「聴書　不言年序也遠近只任聞得之次第訖」として五首が付載されたものを、二品僧正が享禄四年（一五三一）に書写したものである。その奥書は次の如くである。

此一冊菅大納言和長郷以本書写早不及校合間落字書誤以下可有之比興々々不可有外見者也

享禄四年後五月日　　二品僧正

二の写本は、一の和長編を整理した形となっている。その差異は次の三点である（定数歌の一覧表参照）。

1　和長と二品僧正の奥書を有しない。

2　春日社法楽・同若宮法楽の、基綱・実隆両吟百首（各五十首）を百首の部から外して巻末に置いている。

3　「哀傷十首」「明月論十五首」の実隆との贈答、聴書五首を省いて、三十首以上の定数歌集としている。

この作業が誰の手によるかは不明である。

三の型の写本（内容は定数歌の表参照）は、基綱の名を有しなかったため、百首詠の年次によって仮に名付けられて伝わったものである。一ないし二の写本から抜いたものとはみられないので、和長の編次に先立って成立していたものと思われる。

C単一の定数歌について

文明十五年前後の義尚の打聞にも加わり、実隆との親交によって歌人としての名が高かったためであろう。基綱の詠は数多く流布したようである。それぞれについては定数歌の表参照のこと。一の定数歌集に未収のものはない。

なお、基綱・済継・済俊についての伝は、「飛弾史の研究」に年譜を添えて詳しく紹介されている。基綱については殊に義尚の打聞に加わったものとして、当代の和歌史の上で逸すべからざる人物である。

姉小路済継

書目掲出のうち9済継集は私撰集（くわしくは、中世私撰集解題その二、和歌文学研究十五号参照）であるのでこれを除く。また8姉小路済継卿詠は未見のため、残りの七種の写本について紹介すると次の三つの型に分けることができる。

A部立の集

1　姉小路済継卿詠草　永正八正廿五御月次　一写　彰考館（巳・六）顕綱集に合綴

寄若菜祝言　いくかへり君にとのみもかそふらんわかなにこもる万代の春

6　済継詠　写　書陵部（一一一二六五）先代御便覧第二八

柳靡風　ほのかなるけふりはかりの色みえて外に風なき青柳のかけ

B雑纂の集

2　済継卿集　一写　国会（一三二・二〇八）

3　姉小路済継集　一写　書陵部（二〇六・七〇四）

4　参議済継集　一写　書陵部（一五四・五六四）

立春　あまの戸ををし明かたの雲まより春立こゆる逢坂の山

C単一の定数歌

5　済継朝臣詠歌　一写　書陵部（五〇一・七七八）

7　済継朝臣詠歌　一写　高松宮（歌二・一七九）

（初霜）　夕露を過にし秋の名残まて霜のあしたに冬はきにけり

A部立の集について

1は、春二一・夏三二・秋六三・冬三七・恋二六・雑三四、計二一三首を収む。

6は、春一四・夏二一・秋四七・冬二三・恋二一・雑二八、計一五四首を収む。

ともに部立別になっているが類題化されてはいない集である。不幸にして早くに没した（永正一五年一五一八歳）ためであろうか、また子息済俊も夭逝したこともあってか、歌数と体裁において整った家集とはなっていない。

B雑纂の集について

Aの写本に対し、B型は九八〇余首を収める。しかし、部立にも類題にもなっていない集である。三本の奥書は次のごとくである。

本曰写本（2ナシ）此済継卿集自去方令借求三日之内灯火（於（3））写留早本書手跡者九条大閤稙通公也尤不可出窓外者也穴賢々々

慶長三己酉十月十日　　水無瀬三品　氏成（ナシ2）

稙通（文禄三一五九四歳、八六歳）書写とすると、済継の死後比較的早い時間に収集されたものと思われる。しかし、部類されない未整理の形であるとともに、済継の詠でない歌が混入していることに本集の特徴がある。即ち2の写本にそれが示されている。それはまず前記氏成の奥のあとに

此集之歌作者錯乱未考者多追々加校合後可附名（朱）
天明五年巳弥生下旬書写畢　　海鷗散人
文政十一子年霜月西尾定省かりて写早　　越智清通

という二つの識語があること、そして本文中の後半部から、御製・為広・政為・実隆らの作であることが九〇余首に注記されていること、さらには「此歌ヨリ末済継歟為広歟未考之」と百余首に対して注記されていることなどである。殊に為広の詠との混同が甚しい。これら約一九〇首を除くと、済継の詠は約八〇〇首となる。この数は、「続三玉和歌集類題」（中院通勝・基綱・済継の詠の類題集、文化十一年刊）所収の済継の詠に近い。思うに、この集は済継の死後に後人の手による編であり、さらに他人の詠を除いた済継集が編次されて類題集の材料となったものであろう。しかし、その証となる写本は今日のところ伝わっていないようである。

C単一の定数歌について

生前の歌業のわりには、今に残るものが少ない。5と7はともに百首の残欠で、冬一五・恋一五・雑一五、計四五首の詠である。

済継の歌書については以上であるが、A・B所収歌と続三玉和歌集類題所収歌、B写本中の他人の詠混入について、今後こまかな作業が心要とされる。この点については後日を期したい。

済継は父基綱の後を嗣ぎ、実隆、公条らと親しく交わって熱心に歌道に励んだ人物である。今後改めてとりあげるべき歌人と思う。

豊原統秋

3統秋家集、7統秋詠草は未見であるので残りの六部について述べる。なお、大日本歌書綜覧に「豊筑後守詠草」（高松宮）が紹介されているが、現在の目録にはみあたらない。綜覧の解説には、六六首を収め実澄の加点があるとしているが、統秋（一四四〇—一五四四）と実澄（一五二一—一五二）では時代がずれ過ぎる。実隆の誤りと思われる。一方、同名の写本が祐徳の中川文庫にある。内容は4豊原統秋詠と同じで、三十首詠に対して実隆の合点と批語の加えられているものである。綜覧に掲げるものはこれと同じかと思われる。仮に9とする。

また、こうした合点歌書をあげるとすれば豊原統秋自歌合（群書類従 三三）も個人の歌書と言えよう。10として列記しておく。

A部類の集

1 松下抄　一写　静嘉堂（五〇三・一〇）
2 松下鈔　一写　尊経閣（一三・一九）
5 松下抄　一写　天理図書館（九一一・二五・イ三五）
6 松下集　一写　松平文庫（一三七・二七）
立春風　あなしふく音ものとかに巻もくのひはらかすみて春や立らん

B定数歌

8 独吟千首和歌　一写　天理図書館（九一一・二五・イ二九）

立春朝　夜をこめて松かせかすむ住の江や春は海辺にけふ立らしも

10 豊原統秋自歌合　刊　群書類従（二二一）

初春待花　雪のうちに思ひしよりも春の色を待えて遅き山桜哉

4 豊原統秋詠　一写　神宮文庫（第六門・一三七九）

9 豊筑後守統秋詠草　一写　中川文庫（六・二二・三二七九）（定家卿消息詠歌大概と合綴）

早春鶯　ときは山いつれかわかむ鶯の松にあらそふはるの色香は

A部類の集について

松下抄には二つの奥書イ・ロがある。前者は四部に共通し、後者は5・6の写本にのみある。

イ、此一冊統秋朝臣所詠余連々合点和歌抄出之号松下抄云々一覧之次書其銘卑跡可恥之

言の葉よちらてをつもれ都にも　老比丘　逍遙子

心を山の松のした庵

ロ、大永第四暦夷則下旬　豊原朝臣統秋在判

令一校了

さて、これらの奥書により、従来は、統秋の没する前月、即ち大永四年の七月に、実隆がまとめて命名したとされてきた（日本文学大辞典・和歌文学大辞典）。しかし、これは誤りである。イの文は、実は再昌草の大永元年十一月の部分にでてくる。つまり、この時に成立していたのである。そして「余」の語は合点にかかるのであって抄出之号松下抄云々にかかるのではない。そうでなければ、下の一覧之次書其銘の文に相応しない。また、集中の五十番歌合の実隆の奥書と判を、御奥、御判としているのも一つの証となろう。即ち、松下抄は大永元年十一月ころ統秋の自編による私家集なのである。作者七二歳の時である。

銘の由来について。巻末に、4・9の三十首詠中の残月越関と山家と題する二首がある。その山家の詠は特に実隆の褒美を得たものである。本文は次のようになっている。

山にてもうからん時のかくれ家や
みやこのうちのまつの下庵

石の一首誠に趣向事尽候……中略……大隠住朝市と白楽天も作候か当時新造之山居雅趣不浅や返々浦山敷こそ候へ

統秋にとってこれは大きな感激であったらしい。体源鈔（巻七）にもこのときのことが録されている。そして、この歌を巻末におき、松の下庵の語から松下抄と命名したのである。実隆の奥書の歌もこの詠に応じたものである。

部類について。一応部類の集とはしたが、厳密には類題されていない。それは例えば、「千首歌の中に春山」「同春海」「正月十首中に春山」「同十首に春野」というように、合点歌を抄出する際に、定数歌の単位を軸として配列したために生じたものである。これが一つの特色となっている。

諸本の差と歌数について触れておく。

イ・ロの奥書にみられる差異は、さらに次のこととも関連する。1の場合用紙を十（あるいは九）枚重ねて二つ折りにしたものを五束集めた形となっているが、そのうちの二枚つまり四丁が落ちている。2もまたちょうどその部分が欠けている（2はさらに二十行分が脱している）。1は実隆自筆といわれているものであるが、当初からの落丁とは考えられないので、後に失われたものであろう。その系統にあるのが2の写本である。一方、6と7の写本は完本である。それは大永四年の書写に統秋が奥を添えたものと考えられる。

各写本の終りに「已上一千十六首」とある。ところが、6・7の伝本では、春二〇九・奥八七・秋一五七・冬九二・恋一四五・雑二三五・自歌合一〇〇・長歌一・追加二、計一〇二八首あって十二首の増となっている。（1は雑で三一首、自歌合で六首を欠く。）この差の由来は未詳。大永元年の実隆一覧の時点では一〇一六首だったが、その後追加されたためとも思われる。

B定数歌について

8独吟千首和歌は、統秋自筆とされるもので孤本であるという。春秋恋雑各二百首、夏冬各百首の詠で、三六五首に実隆の合点を得ている。明応五年七月のころのことで、実隆公記に記事がある（公記、七・廿）。所々に批語も加えられ、終りに次の奥書がある。

右千首之歌珍奇無双一覧之僻点胸臆剛極傍難雖有憚感思不獲休而已
至察之　亜三台拾遺郎　花押

10自歌合は、名所百首題（建保三年内裏名所百首題）による百首詠を五十番としたものである。実隆の奥書と、明応九年正月二三日の日付がある（群書類従参照）。なお、類従本は三か所に欠文がある。この歌合は松下抄の雑の部のあとにも収められているが、そこでは欠けたところがない。また、彰考館にも一本を蔵するが未見である。

4・9は前述のごとく三十首詠に実隆が合点批語を加えたものである。合点歌十六首は松下抄に入る。体源鈔によれば、永正六年十月十五日ころの詠となっている（巻七、七七九ページ）。

以上が統秋の和歌についての解説である。他に体源鈔所収の詠がある。多くは永正十年前後のもので、実隆との関係において記載されている。松下抄翻刻の機を得たときに、具体的に述べてみることとする。統秋が、心血を注いで体源鈔を著しそして松下抄一巻を編次したこと、その伝記の上で一つの中世の典型を示す。唐木順三氏の作（体源鈔由来）があるが、もっと史実に即した伝記作成が望まれる。蛇足ながら付記しておく。

飯尾宗祇

書目の23長門住吉社宗祇法楽百首は誤りである。これを収める写本の表題に右のごとく書かれているが、内容は後土御門院以下三十人による続歌百首で、内閣文庫の「長門住吉百首」（二〇一・三三三）と同じものである。

宗祇の歌書は比較的単純な形で伝存している。管見にはいったものは次のように分類される。なお、天理図書館蔵の刊本を仮に31とした。また、図書総目録には他に九種ほどの家集の所在が示され、刊記の明らかなものもあるが、今は表に加えなかった。

A 部類の集

一 刊本

22 宗祇法師集　刊　群書類従（二七〇）
19 宗祇詠草　二　寛文十二年刊　伊達文庫（九一一・二五）
31 宗祇法師家集　二　〃　天理図書館（九一一・二五・五一）
21 宗祇法師家集　二　〃　中川文庫
18 自然斎宗祇家集　一　文化四年刊　静嘉堂（五二一・二三）
20 自然斎宗祇家集　一　〃　京大研

二、写本

イ

1 種玉庵宗祇和歌集　一　写　狩野文庫（第四門・一〇六九六）
3 宗祇和歌集　一　写　彰考館（巳・八）
4 宗祇和歌集　一　写　国会（二〇〇・四八）
5 宗祇集　一　写　書陵部（五〇一・六九四）
6 宗祇詠草　一　写　書陵部（一一六五・先代御便覧第二八）
7 宗祇集　一　写　静嘉堂（八二・四五）
8 宗祇詠草　一　写　静嘉堂（五二一・二一）
11 種玉庵集　一　写　京大（四・三三・ト・六）
13 宗祇家集　一　写　森文庫（九一一・一四八・森IOS）
15 宗祇集　一　写　松平文庫（一三七・一四）

ロ

10 宗祇詠草　一　写　神文宮庫（第六門・一二七二）
14 宗祇家集　一　写　森文庫（九一一・一四八・森IOS）

立春　あら玉の春たつらしも天の原ふりさけみれは霞たなひく

（注　20・11の京大本は書目の註記により類推したものである。）

B 定数歌

18 詠五十首和歌（自然斎宗祇家集　文化四年刊に付載）
25 宗祇五十首　一　写　伊達文庫（九一一・二五）

初春　春たては長閑き世にもかへるやと月日に空をまかせてそみる

24 宗祇住吉和歌　写　彰考館（巳・一〇、氏成日光山奉幣和歌等と合綴）

住よしの松こそ道のしるへなれ遠さとをのの雪のかへるさ

C 教訓歌（長歌）

30 若衆短歌　中世近世道歌集（古典文庫）・仮名教訓・続類従（九四六）

見るからに　誰も心を　なやますは　かたちあまりに……

28 29 児教訓　中世近世道歌集（古典文庫）・群書類従（三一一）

つらつら惟んみるに　世の中の　わるき若衆の　ふるまひを……

27 宗祇短歌　中世近世道歌集（古典文庫）・仮名教訓　続類従（九四六）

まつさいわゐを　そなへしは　しつかにこころ　おたしくて……

A部類の集について

22類従本について。部類歌集所収歌は、ほとんどの刊・写本において、春六〇・夏三〇・秋五五・冬四一・恋四五・雑七〇（長歌反歌各一を含む）計三〇一首となっている。ところが、類従本では雑が八一首となっている。増加の歌は自影の讃の歌（雑一六首目、うつしをくも……）と、長歌の前にある「於村松十首詠歌沓冠置名号」の十首である。この形の伝本は他にみられない。増補という点からすれば、他の諸本より後のものと思われる。ついでに言えば、右の事情によるのであろう、本文はあまりよくない。善本により校合する心要がある。

刊本について。現在寛文十二年（一六七二）と文化四年（一八〇七）の二種がある。部類は同じであるが、前者には終りに「桑門宗祇」とあるのに対し、後者には類従本と同じくそれがない。また、後者には詠五十首和歌、宗祇小伝と跋文が付されている。

写本について。桑門宗祇の語の位置と恋部の一首増減とで、仮にイとロの二群に分けてみた。即ちイ群は巻末に桑門宗祇と録し、恋が四五首であるのに対し、ロの二種は、桑門宗祇が巻頭にあり恋の部四三首目の寄心恋のあとに次の歌を入れている点で相違するのである。

寄忍草恋を

里はあれぬ誰をしのふのみたれそとこゝろにとふも露そこほるゝ

次の歌が寄忘草恋という題名であるため、右の一首を写し洩らしたとみることができる。とすると、このロ型の写本が古形を存するということになろう。

さらには、ロ型の14の写本は、宗祇の家集成立に関する次の奥書を有している。

干時永正三年五月上旬之比以竹園御本書写之了

文化九年壬申正月中旬　写模一校畢

この永正三年は宗祇の死後四年目のことである。この奥書と桑門宗祇の署と、そして詞書の体裁とから勘案するに、宗祇家集の成立は生前の自撰ということになると考えられる。集中の冬の部の終りから二首目に「又はよもと思ひし昔のとしの暮にめくりあひて七十むかへる比……」とあることなどから、晩年の十年間において編次したと思われる。成立について以上のような私見を述べておく。

なお14の文化九年の一校の朱筆は、イ型の写本によるものである。このことも、伝本流布の二系統の存在を証するものである。

また、4・7・15の写本が、巻頭歌と二首目の詞書を欠いたり追記したりしている点で共通していることを付記しておく。

B定数歌について

24の写本は「いにしとしの冬つかた……」と始まる序（三ページ分）を有し、奥に

ゆるしなき人めをいかてわすれけん

神はすてしとおもふあまりに

延徳二年九月日

の奥書を有する。宗祇七十歳の詠である。伊知地鉄男氏の「宗祇」によれば、この月に歌神住吉に百韻を手向けた（二五〇ページ）とあるが、同じ時の奉納と思われる。

18・25の五十首は、詠出年次不明である。奥に「僻墨廿三首　二楽院判」とあるので、飛鳥井雅康（宋世）の合点を得たものである。うち六首は部類に収められている。

C教訓歌について

古典文庫、群書類従等に収められている。なお、若衆短歌・宗祇短歌を付載する仮名教訓（続類従九四六）は、三条西実隆の消息で、息女尚子（九条尚経に嫁す）にあてたものである。写本が数種残っているが、宗祇の短歌（実は長歌）を付するのに、東京博物館蔵の「三条西殿女今川」がある。しかし、これには若衆短歌が添えられているのみである。正保三年（一六四六）十一月の写本で、書写代年古く参考となる本文である。教訓歌について以上のことを付記しておく。

宗祇の和歌は、彼の連歌師としての生涯の中でどういう位置をしめていたか、殊に古今伝授の面で定着せしむべき課題が残されていると思う。歌人としての足跡は今後も追求されるべきであろう。

岩山道堅

始めに書目の補訂をしておく。

1と20の写本に、道堅詠九か度十種と注す。

12と13の、百首等七か度・同五か度の注記を削除する。

14の百首三か度のあとに詠二十首が収められている。書目未収である。31とする。

25の標題は詠三十首和歌である。新玉津島社法楽の語を除く。

道堅の詠を多く有する「類聚和歌」（書陵部、五〇一・九二）を30として追加する。

道堅法師自歌合（群書類従三二）を32として加える。

以上の三二種の歌書は次のように分類される。

A　定数歌を主とする集

一、統群書類従本系

4　道堅法師集　一　写　国　会（二一二・二六七）
7　道堅法師家集　一　写　松平文庫（一三七・二四）
8　道堅法師詠草　刊　統群書類従（四四七）

二、雑纂の集

12　道堅法師集　一　写　書陵部（五〇一・七〇九）
13　道堅法師詠　一　写　書陵部（五〇一・八三九）
1　道堅家集　一　写　彰考館（巳・一〇）
20　道堅百首　一　写　松平文庫（一四〇・三二）
30　類聚和歌　一　写　書陵部（五〇一・九一一）

B　定数歌

一、百首

14　百首　写　書陵部（一一一三）先代御便覧第二四
14　百首　写　〃　〃
14　百首　写　〃　〃
15　一夜詠百首　写　〃　〃
10　道堅百首　写　彰考館（巳・一四）百首部類三
2　覚眠集　写　〃　〃
9　詠百首和歌　写　伊達文庫（九一五・二五）道堅両度百首
9　詠百首和歌　写　〃
3　覚眠集　一　写　国　会（二一二・二六七）
6　覚眠集　一　写　松平文庫（一三七・二五）
19　道堅百首　一　写　中川文庫（函一三一）
11　道堅百首和歌　一　写　彰考館（巳・一四）
17　道堅詠百首　写　書陵部（四五八・一）片玉集前二五
21　詠百首和歌　写　樋口芳麻呂　点取類聚
23　道堅法師百首　刊　統群書類従（三九七）

一、五十首以下

32　道堅法師自歌合（五十首）　刊　群書類従（二二一）
25　詠三十首和歌　写　書陵部（一一一三）先代御便覧第五
26　詠三十首和歌　写　書陵部（一一一三）先代御便覧第二四
27　詠三十首和歌　写　樋口芳麻呂　点取類聚七
28　詠三十首和歌　写　井上宗雄　詠三十首和歌
24　詠三十首和歌　写　書陵部（四五七・一六九）詠三十首和歌
24　聖廟法楽（十首）　写　〃　〃
31　詠二十首　写　書陵部（一一一三）先代御便覧第二四
16　聖廟法楽（十首）　写　〃　〃
29　聖廟法楽二十首　写　尊経閣（七〇・什上）細川高国三十首らと合綴

各集の定数歌の所収関係は次のごとくである。最大の集は30類聚和歌であるので、これを見出しに用いて整理したものである。

類聚和歌を標目とする所収関係の表

（雪は、雪玉集所載を示す）

順	歌数	年次	巻頭歌題と初句	作者	1	20	12	13	その他	同詠者
1	三十首	永正十二	江上霞　かすみゆく	公条	1	1				資
3	二十首	永正十二	江上霞　あま小舟	道堅			8	1		実
4	十首	永正十一	早春霞　風ませの	肖柏	2	2				尊
5	十首	永正十	十三夜　けふこよひ	実隆	3	19				
6	十首	永正十一	宗祇13回　ながらへて	実隆	4					
7	十首	永正九	早春霞　春きぬと	道堅	5	3	9	2		実・政
8	十首	永正九	嶺上霞　かきくもる	道堅			10	3		（雪）
9	三十首	永正九	待早霞　松に今朝	道堅	6	4	11	4		公・政
10	十首	永正十	処々立春　氷ゐし	道堅	7	7	5	12	5	公・実・政・公渝
11	十首	永正十	海辺鶯　昨日まで	道堅			13	7		（雪）実
12	三十首	永正十	早春鶯　山ふかみ	道堅	3	8	6	14	6	資・実・公
14	六首	文亀元	面影は	実隆	9	20				
15	十首	文亀二	しら雲の	実隆	10	7				
16	二首	文亀元	さきにほふ	実隆	11	7				
20	五首	永正九	なみたのみ	道堅				15		実
21	十首	永正元	けふみすは	道堅				16	8	（雪）実
30	百首		立春暁　ゆく年の	道堅	12	8	1			9
31	百首		立かへる	道堅	13	9	2			10
32	百首		身をは猶	道堅	14	10	3			14
33	五十首		初春待花　雪のうちに	道堅				9		19
34	二十首		歳中立春　くれゆけは	道堅	15	11	5			（雪）
35	百首		霞立春　ゆく年や	親元	17	13		31		資
37	二十首	明応八	湖霞　うつもれて	肖柏	18	14				
38	十首	永正十三	初春　久かたの	肖柏	19	15				
39	十首		霞隔遠樹　かすむらし（不明）		20	16		4	32	

注　実＝実隆　資＝資直　尊＝尊海　公＝公条　政＝政為　肖＝肖柏　基＝基綱

順	歌数	年次	巻頭歌題と初句	作者	1	20	12	13	その他	同詠者
40	百首		音羽河　たつ春や	忍誓						
41	百首	永正九	音羽河　春やけさ	道堅			17	21		
							22	17		
							18			
							7			
							9			
							2・3			
							6			
							15			
							23			（雪）

類聚和歌未収のもの

御焼物伝授贈答										
詠五十首	明応七	初春　たき物の	実隆	16						
		三笠山		12						
				6						
詠三十首		山霞　おく山の	道堅	23						柏
				21						
						17				基

類従本所収のもの（10～16は歌会詠、贈答の一～三首であるので省略した。）

2	三十首	大永四	早春霞　四方の空	道堅						
			波の色に	道堅						
4	三十首									
5	二十首		立春雲　天つ日の	道堅						
			空の色も	道堅						
6	十四首	永正六								
8	十首	大永五	雲中鶯　いつれ先	道堅					24	
9	十首		初冬時雨　冬きぬと	道堅					16	

（注　3の三十首「早春鶯　又さえん」は、実隆の詠である。道堅のは類聚和歌の12である。）

定数歌の集雑纂の集に未収のもの

11	詠百首		立春朝　出る日の	道堅						
17	詠百首		ふく風の	道堅						
21	詠百首		暁立春　一とせの	道堅						
29	聖廟法楽二十首、永正十		花の香も	道堅						

さて、以上の表にみられる特徴を列記してみる。

(1) 道堅には類題の集がない。このことは当時の代表的な歌人の中で珍しいことである。

(2) 類従本系の家集は、類聚や雑纂の集とは別に編次されたとすることができる。

(3) 類従本系は道堅の作のみを収めているが、12・13は他人の同詠をも含む集である。

(4) 1・20・30は道堅以外の作者の詠をもつものであるが、30は最も多くを収めている。

(5) 以上のことから、30類聚和歌に類するものが親本となってそのうちの道堅に関するものが抜書されて道堅家集と称するものが作られていったと思われる。

(6) 30・1・12・13の諸本には、同詠のものについて「愚歌除之」という表記がみられる。この愚歌の主が、これらの歌書の整理者と思われる。実隆と親しく交わった歌人として、政為・資直・尊海・肖柏らが考えられるが、彼等の歌は「愚歌除之」にもかかわらず書きとめられている。現存する歌が、多く永正期のものであることを考えると、当時実隆の許に出入りした豊原統秋の名が浮かんでくる。類聚和歌にはほとんど宮中関係の人が登場しないことからみて、あるいは統秋の作業によるものではないかと考えられる。

(7) 文明十五年前後の義尚の打聞にも加わった道堅であるのに、永正十年前後の作が多く集められている。これは、実隆や公条にも言えることであるが、この永正期＝後柏原院の時期が和歌の興隆期であった。道堅の和歌がこの期に集中しているのもそれを反映するものである。

(8) 道堅の歌の散在するものとして再昌草がある。そこには贈答として約八〇首ある。また雪玉集所載のものは前記の表に付記した。

(9) 32道堅自歌合（五十首五番）は正六位上凡河内俊恒なる人物の判となっている。これは実隆の筆名と思われる。その跋文に「抑此一帖は、道堅禅師の独吟の五十首を、左右に分て……」とあるように独吟五十首を用いての歌合である。そしてこの五十首は8類従本道堅家集の巻頭におかれているものである。

(10) 類聚和歌所収三十番目の百首「立春暁ゆく年の」は、雪玉集の異本3国会本の巻五の巻末にも収められている。どうしてそこにくみ入れられているかは未詳。

道堅もまた基綱と同じく、義尚の打聞に参画した歌人である。彼の歩みは武家地下のものとして、やはり室町後期における一典型となる。今後考察の対象としなければならないと思う。

＊助教授　一般教科

昭和四十三年十二月十二日受理